

丸井織物（石川県中能登町）は来年、自社工場で使用しなくなった織機を同業の小規模企業に低価格で譲渡し、利用してもらう「設備投資連携事業」に乗り出す。丸井側は織機の処分に必要なコストを削減でき、小規模企業側は購入費用を抑えることが可能になる。産地の中核的企業の設備を有効活用し、質の高い生地を市場に送り出す仕組みを整えることで産地全体の活性化を促す狙い。

計画では、丸井織物が処分するウォータージェット型織機77台の一部を丸井織物が経営、技術面でコンサル支援をしている福島県と小松市の織布メーカー2社に移管する。2社は丸井織物から織機を購入し、それぞれの工場で使用する。

一般的に織布メーカーは、購入した織機を自社仕様に改造して使う。丸井織物の織機も特殊な生地が生産できるように独自の改修を施されており、2社には「丸井版」の織機が譲渡されることになる。こうした

# 小規模企業と中古織機 安価で譲渡

# 設備投資で「連携」

## 丸井織物、産地活性化狙う



丸井織物本社工場で稼働するエアジェット型織機  
—石川県中能登町

手法は繊維業界では珍しいという。

丸井織物では10〜15年ごとに織機を入れ替えているが、小規模、零細企業では設備投資に踏み切れず、更新期間がさらに長くなるケースが多い。丸井織物は従来、中古の織機をインドなどアジア新興国の繊維企業に売却していた。しかし、新興国へ生産技術が流出することを防ぐため、自社仕

み込む取り組みを実施し、新たなビジネスモデルを探りたい」と話した。

丸井織物は、ITを取り入れた新事業の一環として

スマホ向け  
ゲーム開発  
21日から配信

## 生地の多様化に対応

丸井織物は、エアジェット型織機への切り替えを進めている。同社は近年、スポーツ・アウトドアから、ファッション、非衣料分野へと生地の用途を広げており、生産現場も「多様化」に対応した設備を導入する必要があると判断した。

来期（2016年12月期）は、ウォータージェット型織機77台を撤去し、本社工場に最新型のエアジェット型織機48台を導入する。グループ全体の織機の約2割に当たる184台がエアジェット型となる。宮本社長は生地の高付加価値化が進むにつれ、エアジェット型はさらに増えるとみており「さまざまな素材を生産できる態勢を整えたい」と話す。

エアジェット型は、織機の自動化やさまざまなモノをインターネットに接続し新たなサービスを生み出す「IoT（モノのインターネット）」化に対応しやすいという利点もある。

売上高1割増の見通し

今期（15年12月期）の業績予想は、売上高は前期比約1割増の81億円だが、コスト削減効果で経常利益はそれ以上に伸びて8億5千万円となる見通しだ。

て、スマートフォン向けのゲームアプリを開発した。21日からiPhone版を配信する。

ゲームは「誰か為ノ世界」悲しみと始まりのユグドラシル」との名称で、主人公を成長させながら敵と戦う内容となる。価格は無料だが、ゲーム中で使う「アイテム」を購入すると課金される。アンドロイド版は来年4月ごろに配信する。